

ホシザキ野生生物研究所 研究報告会

プログラム・要旨集

日時：平成 25 年 10 月 14 日（月・祝）、11 月 5 日（火）

※両日とも 14 時 00 分～16 時 30 分、同じ内容にて 2 回開催

会場：島根県民会館 第 1・2 多目的ホール

主催：公益財団法人 ホシザキグリーン財団

後援：島根県

プログラム：

（植物分野）

- 1) ふるさと尺の内公園の絶滅危惧種オニバスについて

三浦憲人（ホシザキ野生生物研究所）

（昆虫分野）

- 2) 本土側とは形態や生態が異なる隠岐諸島の昆虫類について

林 成多（ホシザキ野生生物研究所）

（鳥類分野）

- 3) 島根県の砂浜海岸に生息するシロチドリ その生息数は推定できるか

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

（水生生物分野）

- 4) 島根県の礫浜海岸で確認した日本海側初記録のマメアカイソガニについて

桑原友春（宍道湖自然館ゴビウス）

（環境修復分野）

- 5) 宍道湖・中海及び美保湾産魚類の食性調査報告

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

ふるさと尺の内公園の絶滅危惧種オニバスについて

三浦憲人（ホシザキ野生生物研究所）

ふるさと尺の内公園はホシザキグリーン財団の活動目的の1つである、人と自然の潤いのある調和と共生をめざし、地域の自然環境の保全につながる活動を行う場所として整備した丘陵地に隣接する多自然型公園である。園内には、池や小川、小湿地、草むらのほか、多種の樹木が植栽されており、野鳥や昆虫などの野生動植物の生育環境も提供されている。

オニバス *Euryale ferox* Salisb. はやや富栄養化した泥深い池沼や用水路に生育する1年生の浮葉植物で、絶滅危惧植物として環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧 II 類、島根県においては絶滅危惧 I 類に指定されている。島根県ではオニバスの保護と絶滅のリスク分散のため、自生地の外に移植が行われ、ふるさと尺の内公園にも2005年に移植が試みられた。

オニバスは園内の約120 m²の池に移植され、順調に株数が増加した。そして2011年以降は約650株の芽生えを確認することができるようになった。

オニバスの系統保存を継続するためには、基本的な生態を理解する必要がある。栽培・管理を行う中で、1. 種子の発芽について、2. 葉の生長について、3. アメリカザリガニ（以下ザリガニ）の食害について、観察・調査の結果を報告する。

1. 2009年から秋に採取している種子は、翌年春に発芽するものは少なく、翌々年の春から発芽率が高くなることがわかった。

2. 国内では葉の大きさが最大直径2m70cmの記録がある。これまで大きくても1mをこえるものはほとんど見られなかったが、2013年は1m24cmの葉を確認することができた。

3. 水槽を用いてザリガニとオニバスを一緒に入れて観察したところ、ザリガニは楕円形の浮遊葉の葉柄を切断・接食していた。切断・接触された葉柄の太さは1mm前後が多く、最も太いものは2.2mmであった。この結果をふまえ、2.2mmよりも太い葉柄をもつオニバスを、囲いの外に移植したところ、順調に生長した。



本土側とは形態や生態が異なる隠岐諸島の昆虫類について

林 成多（ホシザキ野生生物研究所）

隠岐諸島は日本海の山陰沖に位置する群島である。山陰本土とは海水準の変動により陸続きとなった時代もあるため、島としての隔離期間が短い。そのため、固有の昆虫（種や亜種）は少なく、大半は本土と同じ昆虫が生息している。

隠岐固有の昆虫は地域的に体の形や模様に変異が大きい種であることが多く、隠岐だけでなく日本国内でいくつかの種や亜種に分類されている。一般に飛べない種や餌が特殊なために容易に移動出来ない種などが相当する。飛べない昆虫では甲虫のオキオサムシ（ダイセンオサムシの隠岐産亜種）やオキマイマイカブリ（マイマイカブリの隠岐産亜種）などが代表であり、餌（食草）が特殊である例としては蝶のホシミスジ隠岐亜種がいる。

隠岐に生息する昆虫の多くは本土でもみられる種であるが、その生息環境や生息状況に注目すると興味深い種がいくつかいる。例えば、ヒラタドロムシという水生昆虫は、本土側では主に石が多い大きな川の本流に生息している。しかし、隠岐にすむヒラタドロムシは、隠岐には大きな川がないため、山地溪流など本土側では考えられないような環境に生息している。また、隠岐の水田ではオンブバッタばかりでコバネイナゴやハネナガイナゴはみられない。分布しているのにも関わらず水田に生息しないということは、本土側の生息状況からみれば実に不思議な現象である。島という限られた環境を利用していることがこれらの現象の背景となっているが、生態学的な検討はこれからの課題である。



オキオサムシ（固有亜種；左）とオキアオハムシダマシ（固有種；右）

島根県の砂浜海岸に生息するシロチドリ その生息数は推定できるか

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

シロチドリ *Charadrius alexandrinus* は、ユーラシア大陸や北アメリカ大陸などに広く分布し、おもに海岸の砂地に営巣して繁殖する。日本においてもほぼ全国で見られるが、近年、個体数の減少についての報告例がいくつも見られるようになっており、都道府県版のレッドデータブックに掲載されているところも多い。島根県のレッドデータブック(2004)においても準絶滅危惧に指定されている。また、2012年に公表された環境省の第4次レッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類として新規掲載された。

本種は、島根県においても一年を通して見られ、砂浜海岸や河口部の砂礫地などに生息しているが、県内の生息数についての情報は少なく、特に県内全域を対象としたまとまった記録は見あたらない。



そこで、2011年および2012年に本種の繁殖期にあたる5-7月に県内各所の砂浜海岸（29カ所、総延長約35km）を踏査し、実態調査を行った。その結果、海岸の距離と、繁殖する可能性があると考えられるつがいの数との間には正の相関があると考えられたほか、500m未満の砂浜ではつがいは確認できなかった。さらに、シーズン毎の違いや再現性を検証するために、2013年5-6月にも県内各所（前回調査と同じ27カ所のほか新規10カ所、総延長約43km）で改めて調査を行ったところ、ほぼ同様の結果が得られた。また、この時には営巣地点の砂浜の幅や巣間距離などを測定し、調査中に確認した44巣中30巣が砂浜の幅が30~70mの場所にあったことなど、本種の営巣地点選択の傾向として考えられることについて若干の知見が得られた。

本研究では、これらの結果を元に、2万5千分の1の地形図や島根県統合型GISから砂浜海岸の距離を読み取り、県内で繁殖していると考えられるつがいの数を推定した。海岸の距離や環境の読み取り方によって、その推定数にはある程度の幅があり、海岸の距離以外の条件の影響や、繁殖そのものの数としての検討、経年変化などについては今後の課題として残されたが、こうした具体的なデータによる生息状況の把握は、種の保護を考えていくためには重要なことと考えられる。

本発表の内、2011年の出雲市の海岸における調査結果は、出雲市「平成23年度自然環境調査報告書」によります。

島根県の礫浜海岸で確認した日本海側初記録のマメアカイソガニについて

桑原友春（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

島根県立宍道湖自然館は、島根県内でみられる身近な水生生物を展示する水族館である。水族館の最大の目的は生物を収集し、飼育、展示することであるが、そのほかにも希少生物の繁殖、生きものや環境についての情報を多くの人に広めるといった役割も持っている。こうした日々の業務のなかで、新しい知見を得る機会は多く、本研究もそのひとつである。

マメアカイソガニは、2009年に新種として発表されたばかりで、これまでに太平洋側の紀伊半島、大阪湾、徳島県沿岸でしか見つかっていない。2012年4月、日本海側に位置する島根県松江市島根町の礫浜海岸においてマメアカイソガニの生息を確認したので紹介する。

本種は、最大でも甲幅10mm程度までにしかならない小型のカニで、雄よりも雌のほうが大きくなることが知られている。生息環境は礫浜海岸の満潮線付近にある転石の下で、石をめくると細かい砂利のすき間に、素早く逃げ込む姿が観察された。同所的にみられるカニ類には、ヒメアカイソガニやアカイソガニなどがいる。本種はこれら2種よりも小型であり、よく似るアカイソガニとは、歩脚の後縁に長い毛が生えている点などで見分けることができる。また、本種は大きな石の間に細かな砂利が詰まっているような場所で多く観察されたが、逆に石の間にすき間が多くある環境では観察されなかったことも、先の2種と異なる点である。さらに、同じ島根町において2013年9月に採集した雌が抱卵していたことから、本種の日本海側での抱卵期は秋頃であると推察された。

本記録は島根県および日本海側での初記録であるが、今後の詳細な調査により、日本海側の他の産地が新たに発見される可能性も高いと考えられる。



宍道湖・中海及び美保湾産魚類の食性調査報告

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

汽水は、淡水と海水の間にある幅広い塩分の環境をさす。宍道湖・中海に棲息する魚には、海域から汽水域に進入してくるものが多い。その中で、広範囲の塩分環境を行き来している魚類に、スズキ、ボラ、コノシロ、サヨリなどがある。これらの魚類は、冬季以外は、宍道湖、中海、美保湾と広範な水域において普通に見られるタイプである。

川那部（1969）は、汽水に棲む魚は、その水域で、その時期に多くあって、食べやすいものを幅広く食べている、ことを述べている。先に挙げたタイプの魚類は、幅広い食性を前提にそれぞれの水域に暮らしている。よって、彼らの食性から、その水域の環境の一端を探ることができるものと考えた。

今回は、スズキを中心に食性を調べた。ルアー釣りの印象が強いため、典型的な魚食性と捉えられがちであるが、実際は、魚類よりも、アミ類やエビ類またゴカイなどの多毛類を多く食べていた。

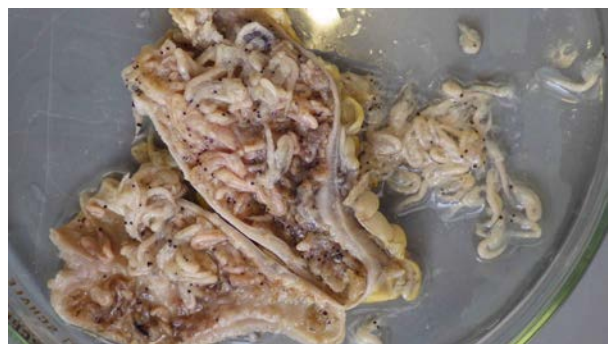
今年5月から9月にかけて、宍道湖では、総体的にはアミ類を多く食べていた。しかしアミ類が、激減した夏場には、それに代わる様々な生き物が餌として利用されている。

一方で、この期間には、もともとアミ類の少なかった中海においては、当初から、多種類の餌をとっていた。また、美保湾では、アミ類を含め、魚類、甲殻類、多毛類など比較的バランスよく食べていた。

今回は、スズキを中心にした途中経過報告の観が強いが、今後、スズキの周辺に暮らす魚類を含めた長期的な食性調査によって、汽水の環境と生態系をより深く探ることができるものと思われる。



刺網（中海）



アミ類（宍道湖）

「ホシザキ野生生物研究所 研究報告会 プログラム・要旨集」

発行 公益財団法人ホシザキグリーン財団 ホシザキ野生生物研究所

〒691-0076 出雲市園町 1664-2

TEL (0853)63-7878/ FAX (0853)63-0987

©公益財団法人ホシザキグリーン財団 無断転載を禁ずる

※本資料は平成25年10月14日・11月5日に島根県民会館にて行われたホシザキ野生生物研究所研究報告会のプログラム・要旨集です。本資料の公開は、当財団および研究所の活動や実績を紹介することを目的としています。転載や引用を希望される場合は、ホシザキ野生生物研究所までお問い合わせください。